

ヨハネの手紙第一 3 章をお開き下さい。この 3 章からは新しいセクションになります。このヨハネの手紙第一が書かれた目的というのは、私たちクリスチャンが神様を個人的に人格的に体験するというものでした。神について知るというものではありません。神を知るというものです。言い換えれば、神を味わうということです。頭では神学的にはいくらでも神について知ることは出来ます。情報として、知識として頭の中に神に関する情報を詰め込むことは出来ます。聖書を勉強することは出来ます。神学者にもなれます。しかし、それと神ご自身を知る、神を味わう、神を体験するということは全くかけ離れています。前にも話したように、天国と地獄の距離というのは実に 30 センチしかありません。それは頭と心臓・ハートの距離であります。頭でいくら分かっている、心で分かっている、頭の知識でなくて心の知識でなければ、私たちは天国には行けません。イエスが主であるということを心で信じて、口で告白するのです。頭で信じるのでは不十分です。勿論知識も大切です。しかし、それを心にまで引き下げなければ何の意味も価値もありません。心で信じるのです。すなわち神を心で感じる。神と向き合ってお話をし、何でも相談して、そして神に心を開いて神を体験する、交わりを持つ。そのことがこのヨハネの手紙第一の書かれた目的でありました。5 章に分けられていますけれども、非常に分かりやすいアウトラインを皆さんには既にお分かちしております。1 章 2 章は神の光がテーマでした。『神は光である』と。その神の光を体験することが 1 章 2 章の内容でありました。それがちょうど前回で終わったところでもあります。今日からは 3 章 4 章の新しいセクションになります。そのテーマは『神は愛である』ということ。神の愛を体験する。これが今から皆さんに覚えて欲しいことです。神の愛をその身をもって体験して欲しい。そして 5 章が『神の命』であります。それがテーマです。ですから 1 章 2 章は神の光を体験する。そして 3 章 4 章は神の愛を体験する。最後の 5 章は神の命を体験する。非常に分かりやすいアウトラインでありましたが、今からその 3 章、神の愛を体験するということを皆さんと一緒に分かち合っていきたいと思えます。

早速 1 節を見て欲しいと思えます。『**私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです。——御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。**』私たちは神の子どもとされました。私たちというのは、勿論イエス・キリストを信じる私たちのことです。ヨハネの手紙を書いた同じ記者である使徒ヨハネは、福音書の中でヨハネ 1:12 のところでこう述べています。『しかし、この方を受け入れた人々（この方というのは勿論イエス・キリストです。イエス・キリストを受け入れた人々）、すなわち、その名を（イエスの名を）信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。』イエス・キリストを信じ、心に受け入れた者は、神の子どもとされる特権が与えられました。神の家族に加えられるのです。父なる神の養子になるのです。父のひとり子はイエス・キリストですが、そのイエス・キリストと兄弟・姉妹となるわけです。孤児であった者も、囚人であった者も、不遇な人生を送ってきた者も、皆イエス・キリストを信じることによって神の子どもとされます。素晴らしい特権、素晴らしい身分であります。私たちは宇宙を造られた方を自分の父と呼ぶことが出来るのです。『御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。』とテキストの第一ヨハネ 3:1 に書いてありました。イエス・キリストを信じた者は神の子どもとされて、そしてその時から父なる神の愛を一身に受ける者となったわけです。あなたは愛されています。

エペソ 1:4~5 も参照して頂きたいと思えます。『**すなわち、神は私たちを（あなたを）世界の基の置かれる前から（地球が造られる前から）彼にあって選び（キリスト・イエスにあって選び）、御前で聖く（神の前で）、傷のない者にしようとされました。**神は、みむねとみこころのままに、私たちを（あなたを）イエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。』あなたは神に愛されています。生まれてくる遙か前、既にあなたは地球が造られる前から神によって見出され、神によって選ばれ、神によって愛されています。素晴らしいですね。生まれる前から、全宇宙が造られる前から実はあなたは永遠の愛をもってこの神に愛されていたんです。それを長

らく知らなかっただけです。イエス・キリストがこの世に来て下さったので、クリスマスにお生まれになって下さったので私たちはその愛を今は知ることが出来るようになりました。他にもいくつかの箇所を皆さんに参照して頂きたいと思います。この神の愛について。

テキストに戻って頂いてちょっと先取りする形になります。**第一ヨハネ 4:10**。『**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し**(世界の基の置かれる前から愛されています。)、**私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**』どれほど愛されているのか、ハッキリ分かります。私たちに御子を与えるほどであります。**ヨハネの福音書 3:16** は誰でも知っている有名な聖句です。『**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**』ひとり子と言えば自分の命よりも大切な存在です。そのような御子をあなたに与えるほどにあなたは愛されています。一番大事なものをあなたに与えるほどに、あなたは神から愛されています。「でも私はそんな愛を受けるに値しません。神のように清くも正しくもない。私のような罪汚れた者は神に愛されるはずがない。そんな資格はない。」

**ローマ 5章 8節**に『**しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**』私たちがまだ罪人であったときというのは、私たちがもう最低最悪の時に神はひとり子イエスを与えるほどに私たちを愛して下さっていたわけです。永遠の愛は途切れることがありません。私たちが生まれる遥か昔から私たちは愛されていますが、私たちがどんなに墮ちても、墮落しても、どんなに背いても、神は私たちをなおも愛し続けて下さいます。私たちがまだ罪人であったとき、最低最悪のあなたは神に愛されています。

**ヨハネの福音書 17:23** を次に開いて下さい。この**ヨハネの 17章**はイエス・キリストが十字架につけられる前夜にゲッセマネの園というところで祈られた祈りであります。祈っておられるのはイエスですから、わたしというのはイエスです。彼らというのはイエスを信じる者たちのことです、クリスチャンのことです。『**わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。**(あなたというのは勿論父なる神です。)**それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように**(父なる神が御子イエスを愛されたように)**彼らをも**(イエスを信じるクリスチャンをも)**愛されたこととを、この世が知るためです。**』驚くべきことが書いてあります。イエス・キリストを信じるあなたは、父が御子イエスを愛されるのと同じ愛を受けているということがここに書いてあります。信じ難いことですが、それは聖書の言葉です。これはイエスの祈りです。間違いありません。御父が御子を愛するのと同じ愛を持ってあなたは愛されているのです。神がイエス・キリストを愛するのと全く同じ愛です。遜色のない愛です。その愛を持ってあなたは愛されているのです。素晴らし過ぎます。信じ難いことですがけれども、信じて欲しいと思います。御父がどんなに素晴らしい愛を与えて下さったのか、**第一ヨハネ 3:1** に戻って欲しいと思います。『**世が私たちが知らないのは、御父を知らないからです。**』皆さんは知っているでしょうか。この世は知りません。イエス・キリストを信じない者たちは、この愛を知りません。知って欲しいと思います。特にこのクリスマスのシーズンに知って欲しいと思います。イエス・キリストがこの世に来て赤子として生まれて下さったのは、私たち罪人のために死ぬためでした。十字架につけられるためでした。クリスマスツリーはまさに十字架であったわけです。それほどまでにあなたは愛されています。そしてその愛は永遠の愛です。あなたが何者であれ、過去に何をしでかしたとしても、また今現在何をしても、これから先どんなおぞましい罪を犯すかもしれない。それでもなお神の愛は変わらずあなたに注がれています。そしてその愛は驚くべきことに父なる神が御子イエスを愛するのと全く同じ愛であります。素晴らしいですね。これ以上ない愛であります。人知を遥かに超えた愛です。是非その愛を体験して下さい。「聖書にそう書いてある。私はそのことを知っている。頭では分かっている。」ではなくて、心でこの愛を受け止めて欲しいと思います。深く味わって欲しいと思います。この**ヨハネの手紙**が書かれた目的は、この神の愛をあなたが体験するためであります。

**2節**に移って欲しいと思います。『**愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜなら**

そのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。』私たちは、すなわちイエス・キリストを信じる者は皆神の子どもです。例外なく神の子どもです。今はどうみても神の子どもらしく見えないかもしれません。隣の人を見て下さい。前後左右見回して下さい。イエス・キリストを信じていると言いながらも、私も含めてまったく神の子どもらしくない、そう見えるかもしれません。全然そう見えません。でもそこに書いてあることを注意してみてください。『**後の状態はまだ明らかにされていません。**』と書いてあります。今の状態はどう見ても醜い汚い染みやシワや傷だらけと思うかもしれません。でも、赤ちゃんのことを思って欲しいと思います。生まれだての赤ちゃん。皆さんも母親として出産の時の思い出して下さい。生まれてきた瞬間赤ちゃんは可愛らしいというよりも、現実的に見て頂きたいと思うのですが、しわくちゃでまるで人の子とは思えないような猿のような顔をしていたり、あとの状態は、後の状態は、その時には分かりません。生まれてきた瞬間はお世辞にも可愛いとは言えないかもしれません。我が子であれば勿論宝物にしか見えませんが、例えば他人の子を見て下さい。一生懸命お父さんお母さんは世界一宇宙一可愛い子供だと言い張るかもしれませんが、客観的に見ても生まれだての子どもで、もしかしたら可愛いどころか醜いとかしわくちゃだとか、これのどこが可愛いのかと首を傾げてしまうこともあると思うのですが、でも後の状態を私たちはすぐには分からないわけです。その赤ちゃんがどんなに美しい大人に成長するのか、私たちはその時には分からないわけです。赤ちゃんの時には大人の姿が分からないのと同じように、今私たちを見てもしわくちゃで染みだらけで傷だらけで、全然神の子どもらしく見えないわけです。でも、いつの日か私たちは確実にキリストの似姿に変えられます。**私たちはキリストに似た者となることがわかっています**と書いてあります。イエス・キリストこそ人類の最高の理想像です。世界中には様々な理想像とされるような偉人たち、英雄たちがおります。ヒーローがおります。でも、イエス・キリスト以上の理想像は他にはありません。クリスチャンでなくても、ノンクリスチャンでも、ヒンズー教徒でもイエス・キリストこそが人間としての最高の理想像であると、マハトマ・ガンジーですらそう言ったわけです。誰もが疑いません。イエス・キリストの生き様こそが人間としての最高の生き様である。私たちはそこを目指し、そしてただ雲をつかむような話ではなくて、それは確実に実現することです。私たちもまたイエスと同じ姿に変えられます。**ピリピ 3:21**にもこう書いてあります。『**キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。**』あなたはキリストと同じ姿に変えられます。あなたの力によってではありません。一生懸命頑張って良いことをして、また一生懸命禁欲して悪いことをしないように、そうやって自助努力によってキリストの似姿に自分を変えるのではなくて、そうではなくてキリストの力によってあなたはキリストと同じ姿に変えられるわけです。そのことを期待して欲しいと思います。信じて欲しいと思います。クリスチャンとしての目的というのは、人生の目的というのは、イエス・キリストの似姿に変えられることであります。

ローマ 8:28~29 も読ませて頂きたいと思います。皆さんがよく知っている聖句です。『**28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには**（一言でそれはクリスチャンのことです。あなたのことです。）、**神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。**（あなたの人生に様々な事が起こります。良いことばかりではありません。悪いこともあります。災いもあります。辛いこともあります。傷を受けることもあります。損害を被ることもあります。でもすべては神が働かせて益として下さいます。）**29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を**（これはクリスチャンであるあなたのことです。）、**御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。**』あなたはイエス・キリストと同じ姿に変えられるように既にもう定められている。予定されている。それが神のご計画です。神のご計画に従って召されたあなたは、まさにこの計画に従って今生かされています。すべてはイエス・キリストの似姿に変えられるためです。それがここで言われている益です。益とは、究極の益とはイエス・キリストの似姿に変えられることです。試練を体験したならば期待して下さい。あなたはイエス・キリストの似姿に変えられるということを。問題が生じた時、期待して下さい。イエス・キリストの似姿に変えられるということを。病気になる時に期待して下さい。イエス・キリストの似姿に変えられるということを。私たちが祈り求めるものは、単に問題が生じたら問題の解決を。病気になったら病気の癒しを。でも究極の益は、問題の解決でもなければ、病気の癒しでもありません。究極の益は、イエス・キリストの似姿に変えられることです。たとえ病気が癒されなくても、たとえ問題が解決しな

くても、それでもイエス・キリストの似姿に変えられるならば、それが最高・最大の益であります。お金では勿論買えません。これは病気の癒し以上のものです。これは問題の解決以上のものです。そのことを神の計画だと知って欲しいと思います。「何故ですか、神様。何故ですか、理解出来ません。納得がいきません。どうしてこういうことが許されるんですか。」その“何故”には既に答えが与えられていることを知って下さい。それが神の計画です。キリストの似姿に変えられるためです。すぐには分からないかもしれませんが、すぐにはピンとこないかもしれません。「何故こんな不幸がこの私に。何故こんな災いが繰り返し繰り返し。何故こんな悪いことばかりが私の身の回りに起こるのだろうか。」すぐには分からないかもしれませんが、でも分かっていることもあります。それはあなたがイエス・キリスト似姿に変えられるためです。辛いことがあっても、どんなに悲しいことがあっても、1 つだけ分かっていることがあります。あなたはイエス・キリストの似姿に変えられるために、今そのことを経験しているんだということ。神がそのことを良しとされているということ。「でも私は別にイエス・キリストの似姿に特別変えられたいとは思いません。そんなことよりもお金が欲しいです。そんなことよりも問題の解決が。そんなことよりも病気の癒しが。」とあなたは思うかもしれません。でも、キリストを知れば知るほどあなたはキリストに似る者になりたいと強く願うようになります。「別にキリストの似姿に変えられなくて構いません。現世利益だけ与えられれば、それで結構です。」と言う人は、キリストをほとんど知らない人だと思います。むしろキリストを知れば知るほどあなたはキリストに似た者になりたいと願うようになります。知らなければそれほど別段そこまでキリストの似姿に似たいとは誰も思いません。キリストを知るとあなたはその生き様に感動します。感心します。感激します。感謝します。「素晴らしいお方。この方が私のためにして下さいったこと、言葉に言い表せません。こんなに素晴らしい方なんて。こんなに素晴らしいことをして下さいったなんて。驚くばかりです。感謝感激、感嘆感心、もう言葉がそれ以上見つかりません。」と。キリストを知れば知るほどあなたは憧れます。魅了されます。そしてその方の似姿に変えられたい、近づきたい。この理想像に近づきたい。あなたのヒーローです。あなたの救い主です。あなたの命の恩人です。あなたを愛して止まない花婿です。その方に近づきたい、その方に似ていきたい。知れば知るほどあなたは自然にそう願うようになります。

テキストに戻って頂くと、『なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。』“そのとき”、それはキリストが現れる時ですが、これは携挙の時です。“携挙”というのはクリスチャンがキリストの花嫁として、神の子どもとして地上から生きてまき上げられることを言います。携挙についてあまりご存じでない方は、**第一テサロニケ 4 章**のところに書いてあります。**4 章 17 節**のところに『次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ(これが携挙のことです。)、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。』空中に一挙に引き上げられ、そこで主と顔と顔を合わせて対面することになります。その時には主のありのままの姿を私たちは目の当たりにします。主のありのままの姿というのは、ヨハネの書いた**黙示録 1 章**にも描写されていますから、後で見えてみて下さい。いつかこの主とまみゆる日がやってきます。その主の姿はどんな姿をされているのか。ほんのわずかですけれども、**ヨハネの黙示録 1 章**のところにその栄光のキリストの姿が描写されています。その時私たちは瞬間的にキリストと同じ姿に変えられます。似た者に瞬時に変えられます。今はまだキリスト似姿には似ても似つかない状態かもしれませんが、でもその日には、携挙の時には間違いなく**100% 確実に**あなたはキリストと同じ姿に変えられます。一瞬にして変えられます。**第一コリント 13:12** にこう書いてあります。『今(今です。今日、この日、この瞬間)、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には(その時というのは携挙の時です。空中に引き上げられ雲の中で私たちは主と)顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが(これはキリストの一部分しか知りませんが)、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。』その時にはイエス・キリストを完全に知ることが出来ますが、今はまるで鏡をぼんやり見ているようです。おぼろげな姿です。イエス・キリストの姿を今は完全に見ることは出来ません。完全に知ることは出来ません。ぼんやりというような状態です。イエスの姿はぼんやりしか見えませんが、それでも素晴らしいです。それでも充分感動します。でもかの日には、携挙の時には、顔と顔を合わせてこの方と対面します。もっと素晴らしい対面がやってきます。もっと素晴らしい出会いが、もっと素晴らしい交わりが、私たちの将来には用

意されています。でも、それまでの間は、地上に生かされている間は、徐々に段階的にではありませんけれども私たちは着実にキリスト似姿に変えられていきます。日々変えられていきます。外なる人は衰えても、内なる人はますます強くなってキリストの似姿に変えられていきます。栄光から栄光へとキリストの似姿へと今変えられつつある、そういうプロセスに今私たちはあります。どうやったら私たちはイエス・キリストの似姿に日々栄光から栄光へと変えられていくのでしょうか。それは御言葉を通してであります。聖書の言葉の中に私たちはイエス・キリストを見出すことが出来るからです。聖書はすべてイエス・キリストについて書いてあります。それが聖書のテーマです。イエス・キリストを知ることが聖書の目的であります。**第二コリント 3:18** も今お読みしたいと思います。『**私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。**』やはり自分の力ではありません。これは御霊なる主の働き、聖霊が働きます。聖霊が聖書を書きました。ですから私たちはこの聖霊に心を開いて、聖霊の働きを信じて身を委ねるべきであります。聖書によれば聖霊はイエスのものを受けてイエスのものをあらわす。イエスの栄光をあらわすと。それが聖霊の働きです。ですから御言葉を学び、そこにイエス・キリストを見出すように読み、そして聖霊に身を委ねていく。万物を従える力を持ってイエス・キリストはあなたをかの日には、イエス・キリストと同じ姿に瞬間的に変えて下さいます。この瞬間的に変えられるというのは、**第一コリント 15 章** に書いてあります。あとでも少し開きますけれども、一瞬にして、瞬きのスピードで私たちの朽ちていく体は、朽ちない体に、栄光の体に変えられます。ですからその日を待望して欲しいと思います。待ち遠しいとしていただくとともに、携挙までに私たちは徐々にではありますが確実にキリストの似姿に変えられていくことも体験出来るわけです。昨日よりも今日、今日よりも明日、あなたはイエス・キリストの似姿に変えられていくわけです。昨日まで全然イエスに似ていなかったあなたは、次の瞬間イエス・キリスト似姿に変えられるということも期待していいわけです。

テキストに戻って頂いて**第一ヨハネ 3:3** の方に目を移して頂きたいと思います。『**キリストに対するこの望みを(この希望を)いただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。**』私たちには希望があります。「もう希望も何もないんです。」それはクリスチャンのポキャブラリーにはありません。クリスチャンには決して失うことのない希望が与えられています。クリスチャンは絶対に絶望しません。その希望というのは勿論携挙の希望です。今がどうであれ、イエス・キリストが戻って来られるその日には、すべては希望に変わります。この携挙の希望を抱く者は皆、イエス・キリストの似姿に変えられることを日々望み、そしてキリスト似姿に変えられることが自分の人生の目的であるということを確認いたします。そういう者は自ずと必然的に自分を清くします。清い生き方を選択するようになります。イエス・キリストが戻って来られる。イエス・キリストが私たちに迎えに来られる日、それが携挙であります。その携挙の日というのは、何年何月何日とは決まっていません。この携挙はいつ起こっても不思議ではないとされるもので、ただその前兆というものはある程度聖書の中に預言されています。こういうことがあると世の終わりが近い。そして携挙がいつ起こっても不思議ではないということがあらかじめ聖書には書かれています。預言という形でハッキリ示されています。結論から言いますと今の私たちの時代は、2011年12月現在もう世の終わりであってイエス・キリストがいつ戻って来られても不思議ではない時代に私たちは生かされています。ですから携挙の希望を持つ者は、イエス・キリストがいつ戻って来ても良いように心備えをして日々歩みます。朝目覚めたらもう携挙で天国に入れて頂いているかもしれない。そのような目覚め方をするわけです。「イエス・キリストが今晚戻って来られます。今晚携挙があります。」ということになった時にあなたどうするのでしょうか。相も変わらず自堕落な生活をするのでしょうか。今晚イエスが戻って来られる。大慌てであなたは身辺整理をすると思います。「困った。そんなにすぐに戻って来られては困る。」と、自ずと綺麗な生き方をしますね。それはちょうど免許証の有効期限が切れたことも知らずに運転している時に起こる自然現象と言って良いかもしれません。有効期限が過ぎていたならば、あなたは今までにない程に慎重に注意して車を運転するようになると思います。有効期限があって余裕で運転している時には平気でスピード違反します。平気で駐車違反します。平気で一時停止はしません。でも、自分の免許証が実はもう有効期限が切れているということが分かったら、あなたは(運転しないのが一番ですけれども)運転しなければいけない状況になった時、または運

転中に気づいた時には、これまでにないほどに慎重に模範ドライバーとして運転するようになるわけです。それと同じようなものです。似たようなものです。イエス・キリストが戻って来られるということが本気であなたの中に信じられているのであるならば、あなたは注意して生きるようになります。いつ戻って来てもいいように。今イエスが戻って来られるとしたら、あなたはどうするでしょうか。この携挙のタイミングについては、クリスチャンのあいだではいろいろな意見が分かれます。聖書を文字通り信じる者たちは、(これは私の立場でもあります。この MGF の立場でもあります)それは患難期前携挙説と呼ばれるものです。患難期、すなわち世の終わりには 7 年間の患難時代がやって来ます。反キリストという世界総統がヨーロッパから現れて、中東に 7 年間の和平条約を結びます。でも、それは実は患難時代の始まりになるわけです。でも、教会はその前に地上から引き上げられる、携挙される。なぜならば患難時代というのは、神と小羊イエス・キリストの怒りが注がれる時代であるからだ**と黙示録の 6 章**には書いてあります。これまでなかったような未曾有の天変地異、恐ろしい災害、疫病、大迫害、そうしたものが集中して世界同時多発的に起こります。それは神の怒りがキリストを拒絶する罪の世界に注がれる日です。その時代です。その時代に神の子どもが怒りの対象になるとは考えられません。この話については**第一テサロニケ 5 章**に書いてあります。私たちは神の御怒りを受けるように定められているわけではありません。患難時代に取り残されて、その時代を生き抜くように定められているのではないと、ハッキリ書いてあります。いずれにしても聖書を文字通り理解するならば、患難期前携挙説という立場をとります。Pre Tribulation と英語で言います。でもある者たちは「否、そうではない。クリスチャンの大半は生ぬるいから、少し痛い目にあって鍛えられなければ、そうでなければ天国には入れない。」ですから患難期のちょうど真ん中あたりで携挙される、患難期中または患難期中期携挙説。7 年間の患難期のちょうど中間ですから、3 年半経った時に教会は携挙されるという立場の者もあります。または、患難期後、7 年間の終わりに、7 年間バチリクリスチャンは患難を通して、その大半は迫害され虐殺されますけれども、殉教しますが、でも終わりには携挙がある。携挙と同時に所謂再臨も同時に起こるという立場ですけれども、そのような 3 つの立場が大きく分けてキリスト教界の中に見られます。患難期前携挙説、これは聖書を文字通り理解する者たちの立場で、それはイエス・キリストの携挙がいつ起こっても不思議ではないとする立場です。反キリストが現れたらもう 7 年間しか残っていないわけです。でも、その前に携挙があるということですから、いつ起こるか分からないという立場です。反キリストがいつ現れてもおかしくないというのが今の時代でありますけれども、でも他の立場で患難期中携挙説または患難期後携挙説は全てそのタイミングが計れてしまうものです。反キリストが現れたら 7 年間しかないわけですから、中期の人たちは 3 年半待たばもう携挙があるわけです。または後という立場、患難期後の立場の人は、7 年間という目安があるわけです。そういう人たちは、いつイエスが戻って来られても良いようにというような考えは持てません。「まだ余裕がある。3 年半あるから。7 年間あるから。」そういう人たちは自分を清くするような生き方をむしろしない、しづらい、誘惑が多いと言っていると思います。自分を清くする生き方を望むのは、いつイエス・キリストが戻って来られても不思議ではない、いつでも準備していなければならないとする立場の人たちだけであります。イエスの教えにもその事が盛り込まれています。イエスは「**世の終わりにはこのようなことが起こります。このようなしるし・前兆が起こりますから、あなた方は注意していなさい。目を覚ましていなさい。**」それは患難期前携挙説の人たちに対するアドバイスであります。というのは、患難期中携挙説、患難期後携挙説の人たちは別に注意してなくてもいいわけです。反キリストをいつもチェックしていればいいわけです。反キリストが現れたら、もう目安が分かるわけですから。彼らはイエス・キリストを待ち望むよりも、反キリストのことを待ち望むわけです。おかしな話です。でもイエスは、いつ携挙が起こっても良いようにあなた方は用心していなさい、目を覚ましていなさい、注意していなさいという言い方をしています。これは切迫しているもの、緊迫しているものだというのがイエスの教えです。

特に**マタイの福音書 24:44~51**を開いてみて下さい。世の終わりにはこのような前兆が起こりますというのが**マタイ 24 章**全体にまとめられています。『**44**だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。(イエスが言っています。人の子は、イエスは、思いがけない時に来るのですから。患難期中携挙説、患難期後携挙説の人たちは、これには該当しません。思いがけない時ではないわけです。彼らにしてみた

ら、もうあらかじめ分かっている時、反キリストが現れたら3年半後だとか、または7年後だとか、分かっているわけですから、それは思いがけない時にはなり得ないわけです。イエスの教え1つとっても、携挙は患難期の前に必ずあるということは一目瞭然であります。でも、それを信じたくない人たちが、聖書を文字通り理解したくない人たちが、その他の立場をとるわけです。その方が自分たちにとって都合が良いからです。その方が自分たちがやりたい放題出来るからです。) <sup>45</sup> 主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。 <sup>46</sup> 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。(いつ主人が帰ってきてても良いように自分を清くしているそういうしもべです。) <sup>47</sup> まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。 <sup>48</sup> ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、「主人はまだまだ帰るまい。」と心の中で思っている人たちというのは、患難期中携挙説、患難期後携挙説の人たちのことだと。愛をもって語っていますけれども、それが主が言われていることです。私の言葉ではありません。悪いしもべで「主人はまだまだ帰るまい。」と心の中で思い、「イエスがいつでも戻って来られるなんて、そんなことを信じるなんて馬鹿らしい。患難期前携挙説、そんなバカな。本気で携挙なんか信じているのか。」と言う人たちは、悪いしもべです。彼らは何をするかという(49節で) <sup>49</sup> その仲間を打ちたたき(クリスチャン同士で争うわけです。「患難期前携挙説、馬鹿らしい。キリスト教原理主義者だ。ファンダメンタリスだ。危険な思想を持っている。」そして)、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると(彼らは自堕落な生活をするようになります。)、 <sup>50</sup> そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。(反キリストが現れて3年半後だとか、7年後だとかいう話では全くありません。思わぬ時です。) <sup>51</sup> そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。』厳粛に受け止めて頂きたいと思います。「主人はまだまだ帰って来ない。携挙なんてまだまだ先だ。」と思っている人たちは、間違いなく他のしもべを、他のしもべたちを打つようになります。いじめるようになります。馬鹿にするようになります。攻撃するようになります。見下すようになります。そして、この世を謳歌するようになります。「まだまだ主は戻って来られない。もっとこの世を楽しみたい。」酒を飲んで、面白おかしく。酔っ払っている時にイエスが戻って来られたら、これほど恥ずかしいことはない。ポルノサイトを見ている時にイエス・キリストが戻って来られたら、これほど恥ずかしいことはない。夫婦喧嘩して、言い争って、お互い罵り合っている時にイエス・キリストが戻って来られたら、これほど恥ずかしいことはない。携挙がいつ起こっても不思議ではないと信じている人たちは、自ずと自分の生活を正します。改めます。清めます。自分を清くします。

「あなたはそう言うけれども、もう10年以上前からあなたは、イエス・キリストがいつでも戻って来られるなんて話をしている。携挙はいつあっても不思議ではないと、あなたは教会を始めた頃からそう言っているじゃないですか。でも、イエスはまだ戻って来られていないのは一体どういうことか。」と私をなじる人もいるかもしれませんが。でも今から100年前、D.L.ムーディという人、チャールズ・ハットン・スポルジョンという人は、イエス・キリストがいつ戻って来られても不思議ではない。いつ戻って来られても良いように、患難期前携挙説を持って多くの人々に御言葉を説きました。明治の有名なキリスト者、内村鑑三もそうでありました。イエス・キリストがいつ戻って来られても良いように。彼らの生き様を見てみて下さい。彼らがこの世に残したインパクトを見てみて下さい。クリスチャンとして素晴らしい偉大な功績を残しました。彼らは一様にイエス・キリストがいつ戻って来られても良いような生き方をした人たちであります。でも勿論彼らの時代には、イエスは戻って来られませんでした。そう説きながらも、そう教えながらも、イエスは彼らが生きている間には戻って来られませんでした。さらに時代を遡って12世紀、アッシジのフランチェスコ。皆さんもよく知っている人です。カトリックもプロテスタントもこの人の名を知らない人はいません。アッシジのフランチェスコ。この人もまたイエス・キリストがいつ戻って来られても良いように自分自身も歩み、周囲にもその様に教えておりました。また『キリストに倣いて』という聖書に次いで最も読まれている本と言われているものを書いたトマス・ア・ケンピスという人。この人もカトリックならびにプロテスタント両方で敬われている聖徒ですけれども、15世紀の人です。『キリストに倣いて』という本を読んでない方は是非読んで下さい。お薦めの本ですが、その人もまたイエス・キリストがいつ戻っ

て来られても良いように教え、自身もそのように歩んでおりました。また 2 世紀の教会教父という古代キリスト教の霊的リーダーの 1 人でエイレナイオスという人もまたイエスがいつ戻って来られても良いように。また使徒教父と呼ばれる、使徒の弟子たち、十二使徒の弟子と呼ばれる人たち。やはりこの人たちも 1 世紀から 2 世紀の時代に活躍した人です。ポリュカルポス、この人もまたイエス・キリストがいつ戻って来られても良いように教え、そのように生きました。そして 2000 年前のパウロという人もまた、新約聖書の大半を書いたパウロという人もまた自分の時代に、自分が生きている間にイエス・キリストが確実に戻って来られることを堅く信じて、またそのように周囲にも教えて、そのように生きました。でもすべてそのように教えながらも、そのように歩みながらも、彼の時代にはイエス・キリストは戻って来られませんでした。「空しいじゃないですか。」とあなたは言うかもしれません。でも私は、その空しいとあなたが言うそのグループに自分を是非加えてもらいたいと願い求めたいと思います。願い出たいと思います。私も自分の生きている時代にイエス・キリストが戻って来られると確信しています。でも万が一私が生きている間にイエス・キリストが戻って来られなくても私は全然構いません。後悔もしません。イエスがいつ戻って来られても良いように生きていきたい。それが私の願いです。パウロやポリュカルポスや、またエイレナイオス、アッシジのフランチェスコや、またトマス・ア・ケンピス、D.L.ムーディやチャールズ・ハットン・スポルジョン、内村鑑三、そうした人たちと同じグループに私は属したいと願います。含めてもらいたいと願います。彼らのように私も生きたいと願います。彼らのように死んでいきたいと願います。でも、それでも私は自分が生きている間に 100% 携挙があると信じています。それは曲げるつもりはありません。狂信的だと言われても、何でも構いませんが、そう信じて生きていきたい。それが、ヨハネが言っているところの『キリストが清くあられるように、自分を清くします。』という生き方であります。

テキストに戻って頂きたいと思います。第一ヨハネ 3:4『罪を犯している者はみな、不法を行なっているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。』今までの流れとは全く対照的です。コントラストです。すなわち、自分を清くする人たちとは全く対照的な人たち。罪を犯している者たち。「自分を清くする者たち VS 罪を犯している者たち」のコントラストです。勿論この罪を犯している者たちというのは、クリスチャンのことではありません。少なくとも、新しく生まれたクリスチャン、新しく生まれたまことのクリスチャンではなくて、自称クリスチャンです。ここで今注意して皆さんにお伝えしたいことがあります。この罪を犯しているの「犯している」という言葉。これはギリシャ語の文法ですと時制が実は、所謂現在完了形に相当するものです。意味するところは、継続する。罪を継続して犯すというのが厳密なここでの意味であります。罪を継続して犯している者、または罪を習慣的に犯している者。それはクリスチャンではないと言っているわけです。クリスチャンでも勿論罪を犯します。私も罪を犯します。皆さんも罪を犯すはずであります。この中に罪を犯さない人は 1 人もいないと思います。でもその時皆さんは罪を犯して葛藤を覚えると思います。「なんてことをしてしまったんだ。」またはどうしても止められないというような罪があったときには、その罪と格闘します。葛藤しますし格闘します。そして後悔もします。でも、ここで言われている『罪を犯している者たち』というのは、クリスチャンではありません。継続的に罪を犯し、習慣的に罪を犯し、それは言わば英語で言うプラクティス practice というものです。罪を毎日のように犯し続けて、そして言わば罪の練習・演習をしてさらに大きな罪を犯そうと、そのために毎日罪を犯しているような生き方をしている人たち。彼らは確実に救われておりません。ノンクリスチャンです。不信者です。クリスチャンはそんな事は夢に思いません。今罪を犯しているけれども、今日も罪を犯してしまったけれども、この前と同じ罪を犯してしまったけれども、「もっと大きな罪を犯すために私はこれをやっているんです。」とはあなたは思わないと思います。この習慣的に継続的に罪を犯すというのは、繰り返し繰り返し規則的に罪を犯し、その先に願い求めているものはもっとおぞましい、もっと大きな罪を犯したい。犯してやろう。そのような欲望が、願望が横たわっているわけです。ですからここで言う『罪を犯している』というのは、1 度や 2 度とか、たまにはではなくて、もう毎日意図的に、もっと大きな罪を犯すために日々罪の鍛錬みたいな、そういうレベルの人たちであります。

次にそのことを踏まえて読んでいきたいと思いますが 5 節。『キリストが現われたのは(これはクリスマスの意味ということです。目的です。)罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。』イエス・キリストが現れたのは、クリスマスの目的は、私たち罪人の罪を取り除くためでありました。ヨハネの福音



書 8 章というところに、3 節を見て下さい。『<sup>3</sup>すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕えられたひとりの女を連れて来て、真中に置いてから、(姦淫、現在では日本ではもう死語のようになっています。昔は姦淫罪という罪もあったわけですが、姦淫というのは所謂婚外交渉です。結婚もしていないのに他の異性と性的関係を持つということです。婚外交渉、または婚前交渉とも言えます。不倫だとか浮気と平たく言えばそういうことでもあります。そのような現場で捕えられた者、女がイエスの前に引きずり出されて来ました。)<sup>4</sup> イエスに言った。「先生、この女は姦淫の現場でつかまえたのです。<sup>5</sup> モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。(石打ちというのは、処刑ということです。極刑に値する罪です。)」ところで、あなたは何と言われますか。』<sup>6</sup> 彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。<sup>7</sup> けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」<sup>8</sup> そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。<sup>9</sup> 彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。<sup>10</sup> イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」<sup>11</sup> 彼女は言った。「だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。』』すべての人は罪を犯しました。ですから罪人です。でも、イエスには何の罪もありませんと第一ヨハネ 3:5 には書いてありました。ここでも、イエスには何の罪もないということが証明されました。そのイエスが、姦淫の現場で捕えられた、極刑に値するようなおぞましい罪を犯したこの女性に対して、なんて言われたのか。素晴らしい言葉です。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」イエス・キリストが現れたのは、罪を取り除くためでした。彼女はイエスに出会ったので、もう罪を犯す必要がなくなったのです。ですから「もう罪を犯してはなりません。」というのは、「もう罪を犯す必要がなくなったのだから、これ以上同じ過ちを犯してはならない。」と言っているわけです。これが私たちの立場です。罪を犯すことも出来ますが、罪を犯さないことも出来る者に変えられました。

テキストに戻って頂きたいと思います。第一ヨハネ 3:6 に戻って下さい。『**だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。**』姦淫の現場で捕えられた女は、もちろん罪を犯しておりました。でも、彼女はキリストを見たのです。キリストを知ったのです。キリストがどのような方か体験したんです。ですからもう彼女は罪を犯さないで良い、犯さなくて良い、そういう新しい生き方を与えられたわけです。7 節に『**子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。義を行なう者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです。**』<sup>8</sup> 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。』自称クリスチャンという人たちは、罪を継続的に習慣的に犯している者たち。でも彼らは実際のところ、罪を犯している者は、すなわち罪を習慣的に継続的に犯している者は、悪魔から出たものと。その後、神の子が現れたのは、イエス・キリストが現れたのは、先ほども同様のフレーズを 5 節に見ました。『**キリストが現われたのは**』これもクリスマスの目的であります。2 つ目的がここにまとめられています。ひとつは 5 節の『**キリストが現われたのは罪を取り除くため**』もうひとつが 8 節の『**神の子(キリスト)が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすため**』キリストが 2000 年前にこの世に来られたのは、赤子の姿をとってクリスマスにお生まれになった目的は、2 つあるとここに書いてあります。クリスマスの目的は 2 つある。1 つは罪を取り除くため。バプテスマのヨハネはイエスが歩かされている姿を見て、指をさして言いました。「**見よ、世の罪を取り除く神の小羊。**』ヨハネの福音書 1:29 に書いてあります。「**見よ、世の罪を取り除く神の小羊。**」イエスの姿を見た時にバプテスマのヨハネは、そのように形容したわけです。イエスを知ればあなたも感謝で溢れてきます、いっぱいになります。イエスを見る時に「**見よ、世の**」というよりも「**見よ、私の罪を取り除いた神の小羊。**」と。イエスを見れば見るほどあなたは、イエスに感動し、感嘆し、感謝し、そして「**この方に近づきたい、この方に似る者になりたい。**」と願うようになります。あなたの個人的な罪のそのひとつひとつをイエスは十字架で負って、そして完全に清めて、除去して下さいました。そしてひとつひとつの罪に対して罰金を支払って下さいました。罪の代価をご自身の命をもって払っ

て下さったんです。罪の借金を全て弁済して下さったわけです。私たちがとても払い切れないその膨大な罪の借金をイエスがすべて肩代わりして下さったわけです。それがクリスマスの目的です。もう一つは **8 節**にある『**悪魔のしわざを打ちこわすため**』悪魔のしわざというのは、まさに罪の力です。悪魔の働きというのが、しわざの意味ですが、悪魔の働き、悪魔のしわざ。それは罪の力によって私たちを惑わすわけです。悪魔は私たち神の子ども殺すことは出来ません。滅ぼすことは出来ません。でも、私たちを罪の力によって自滅させることは出来ます。罪の誘惑を仕掛けて自滅することを、サタンは計略として戦略として持っています。それが悪魔の働きです。でも、その悪魔の働きをイエス・キリストは打ち壊されたんです。ヘブル **2:14~15** にこう書いてあります。『<sup>14</sup> **そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。**(主も私たちと同じ血肉の体を持ちになったということです。)これは、その死によって、**悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、<sup>15</sup> 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。**』私たちは悪魔の働きに惑わされて、時に罪に誘惑されて、そして自滅するような、自分の人生を台無しにしてしまうような、また自分の健康を失ってしまうような、そんなおぞましい、またそんな悲しい結果というものを自らにもたらしてしまうわけです。でも、イエス・キリストはそのような悪魔のしわざを、その働きを打ち壊すために来られました。あなたはもうこの罪の力から解放されるんです。確かに誘惑はあります。確かに罪の引力は強いかもしれませんが。あなたを惹きつける力は凄いパワーかもしれませんが。でも、イエスはそのような力を既に打ち壊して下さいました。もうあなたはその習慣的な罪から逃れることが出来ます。やめることが出来ます。足を洗うことが出来るんです。

ローマ **6:4~11** のところも今読ませて頂きたいと思います。『<sup>4</sup> **私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。**それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、**私たちが、いのちにあって新しい歩みをするためです。**(クリスチャンは新しい歩みをするためにこの世から救い出されました。今までと全く同じような、これまでの人生の自堕落な生活の延長を生きるのではなくて、全く新しい歩みをするために救われたんです。変えられたんです。)』<sup>5</sup> **もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。**<sup>6</sup> **私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。**<sup>7</sup> **死んでしまった者は、罪から解放されているのです。**<sup>8</sup> **もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。**<sup>9</sup> **キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。**<sup>10</sup> **なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。**<sup>11</sup> **このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。**』私たちは新しい歩みをするために救われました。罪の奴隷からもう解放されているんです。罪はいまだに犯しますけれども、もうその罪に縛られ続けることはありません。つまり、罪に支配されるとか、罪に飲まれるとか、罪にコントロールされるというような弱さはもう私たちの内にはありません。それらに打ち勝つ力が与えられています。克服する、勝利する力が与えられているんです。前は出来なかったかもしれませんが。どうしてもやめられなかったかもしれませんが。絶対に変えられないと、あなたは諦めていたかもしれませんが。でも、今はそれが叶うということを知って下さい。

テキストに戻っていただいて**第一ヨハネ 3:9** に『**神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。**(神から生まれた者というのは勿論クリスチャンのことですが、罪を犯しません。クリスチャンは、罪を犯しません。「どうしよう、私はもうクリスチャンではないのですか。」と。なぜなら) **神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。**』クリスチャンは罪を犯すことができないのです。「どうしよう。」でも、振り返って頂きたいと思います。**第一ヨハネ 1:8**の言葉です。そこを思い出して頂くと、何か矛盾を感じるかもしれませんが。**第一ヨハネ 1:8**『**もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。**』「私は罪なんか犯していません。」と言う人は嘘つきだと言っているわけです。ところが今読んだ**第一ヨハネ 3:9** によ

れば『神から生まれた者は、クリスチャンは罪を犯しません。』だとか、『罪を犯すことができないのです。』明らかにこれは矛盾ではないですかと、あなたは思うかもしれません。でも、もう一度ギリシャ語の文法の時制を思い出して下さい。この「罪を犯す」というのは、継続するアクションです。習慣的に罪を犯すということです。時たま罪を犯すとか、そういう話ではありません。勿論私たちは間違いなく毎日数え切れないほどの罪を犯しますが、それは必ずしも習慣的に罪を犯しているとは言えません。それは私たちの弱さから、罪の性質を抱えている肉体から来ているものですが、それを皆さんは喜びを持って習慣付けているわけではないと思います。罪を犯すことをなによりもの楽しみとして、毎日やめられない、楽しくて仕方がない。そう思ってあなたは罪を犯し続けているわけではないと思います。本当はこんなこと、したくないし、やりたくもない。本当にこんなことをやってしまって、言ってしまうと後悔。「なんてことをしてしまったんだ。」それがあなたの本音だと思います。ですから、ここで罪を犯さないとか、罪を犯すことができないというのは、あくまで継続的に習慣的に罪を犯すことなどできない。すなわちノンクリスチャンに逆戻りすることはできないと言っているわけです。

もう一つ注目して頂きたいキーワードは「神の種」という言葉です。9 節に「神の種」という言葉があります。『種』といのは『精子』とも訳せる言葉ですが、これは命のことを表します。種には命があります。死んだような種でも命があります。ヨハネ福音書 1:13、先ほど冒頭では 12 節を読みました。『<sup>13</sup>この人々は(イエス・キリストを受け入れ、イエスの御名を信じたクリスチャンのことです。この人々は)、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。』と。神によって生まれた人たちというのは、血によってではない、肉の欲求や人の意欲によってではない。これは完全に自分以外の源からやってきているものです。自分以外の命です。それが「神の種」です。言い換えれば神の命、キリストの命のことです。イエス・キリストを信じる者の内には、イエス・キリストが住んで下さいます。内に住む。内住して下さい。そのキリストの命によって今あなたは生きているわけです。ガラテヤ 2:20にもそのことが書いてあります。『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。』

この「神の種」というのは、神の命、キリストの命、キリストが内に住まわれることというふうにも理解出来ます。同時にこの「神の種」というのは、イエス・キリストがマタイの福音書 13 章で語られた種のことでも指すのではないかと思われまます。種まきのたとえ、よく知っていると思います。その種とは神の言葉を表すとイエスが解説してくれております。心の土壌に種が蒔かれます。でもその心の土壌は、4 種類あるわけです。それら 4 種類もたとえ話の中に出てきます。良い地に蒔かれたならば、良い地は実を結びます。30 倍、60 倍、100 倍と実を結ぶわけですが、ですからそこで言う種は、神の言葉ともれます。神の種とは御言葉である。第一ペテロ 1:23 も今参照したいと思います。『あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。』私たちは神の言葉によって新しく生まれた者、新生したクリスチャンとなったということでもあります。

事実、神の言葉、御言葉は、私たちを罪から守るものです。御言葉は私たちを罪から清めるものです。皆さんにはいつもセットで聖句を紹介しています。3 つの聖句をいつもセットで紹介していますが、お馴染みになっていると思います。詩篇 119:9~11。そしてエペソ 5:26。ヨハネの福音書 15:3。この 3 つをいつもセットで紹介しています。何度も紹介しているのもうお馴染みになっていると思います。またかと思われるかもしれませんが、何度でもお伝えします。大事ですから。読み上げますから聞いて下さい。

詩篇 119:9~11<sup>9</sup>『どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。(もう私は若くありませんとは言わないで下さい。若くなくてもあなたは罪を犯すはずですから。)あなたのことばに従ってそれを守ることです。(神のことばに従って守れば、あなたはきよい生き方をすることが出来ます。)<sup>10</sup> 私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから(神の御言葉から)迷い出ないようにしてください。(素晴らしい祈りです。)<sup>11</sup> あなたに罪を犯さないため(罪はすべて神に対して犯すものです。人に罪も犯しますが、それは実のところ神に対して犯

すものであります。あなたに罪を犯さないため、私はあなたの言葉を頭に蓄えましたとは書いてありません。)、私は、あなたのことばを心にたくわえました。』大事です。

そして、セットでエペソ 5:26 も紹介しました。『<sup>26</sup>キリストがそうされたのは(そうされたというのは、キリストが教会を、あなたを愛されたのは)、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、<sup>27</sup>ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を(あなたを)、ご自分の前に立たせるためです。』みことばにより、水の洗いをもって、あなたをきよめられる。御言葉が、聖書があなたを罪から守り、罪からあなたをきよめます。

そしてヨハネの福音書 15:3。3点セットです。いつも覚えて下さい。『あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。』と言われたのは、イエス・キリストであります。人となられた言葉、受肉された言葉、イエスの言葉です。イエスの話された言葉によってきよめられる。今皆さんがここに来ているのは、御言葉の水を洗いをもってきよめられるためです。「1週間に1度日曜だけでは足りません。」と言う人は、本当に罪深い人たちであります。罪深いからこそ何度でも教会に来るわけです。何度でもバイブル・スタディーに参加するわけです。御言葉を頭に蓄えるためではありません。皆さんの本当に心の底から願っていることは、もう罪を犯したくないからです。「神様に対して罪を犯したくない。もうこんな破壊的な生き方はしたくない。神の祝福の内を歩みたい。赦しの恵みに与って希望を持って、平安を持って、これ以上ない喜びを持って、新しい歩みをしたいから。だから私はバイブル・スタディーに来るんです。足繁く通うんです。人から馬鹿にされたって。「そんなに教会に何度も行ったら何になるのか。そんな非生産的なことをして何になるのか。」そう言われたとしても。」自分の罪がどんなに黒いのか、炭よりも黒いのか、汚れているのか、知っている者は人から何を言われようとも「私には御言葉が必要です。もっと洗われなければいけません。きよめられたいのです。自分をきよくしたいです。なぜならばイエス・キリストがもう戻って来られるから。すぐに戻って来られるから。いつでも準備をしておきたい。」それが皆さんのハートだと思います。ここに集まっている皆さんは、同じ思いをもってここに集まって来ていると、私は信じています。

ですから、もはやあなたは習慣的に意図的に罪を犯し続けることは出来なくなります。もうそうしたくないのです。罪を犯しているクリスチャンは、世界で最も惨めな人間です。皆さんにはそれが分かります。ノンクリスチャンの時の方がもっと楽だったと思います。クリスチャンになってから罪を犯したら、ノンクリスチャンの時に味わうよりももっと悪い後味です。凄い後悔です。自責の念、罪責感、凄くつらくなります。クリスチャンの中で罪を犯している者、彼らは世界で、ノンクリスチャンも含めて最も惨めな人たちです。なぜならば罪が主イエス・キリストを楽しめなくさせ、そして主があなたを罪の生活で楽しめなくさせているからです。中途半端な立場なんです。罪のゆえにあなたは主をエンジョイ出来ません。と同時に、主のゆえにあなたは罪もエンジョイ出来ないんです。だから惨めなんです。以前は、キリストを知る前は、罪を心ゆくまで楽しめました。でも、主を知ってしまったので、今はそれが出来なくなりました。罪を犯しますけれども、あまりにも後味が悪すぎるわけです。中途半端です。でも今、罪を犯せば、あなたは主のきよい臨在を満喫出来ないわけです。ですから、罪を犯しているクリスチャンほど惨めな存在は他にはありません。だから私たちは罪を犯したくないんです。そんな惨めな生き方をしたくないから。それはノンクリスチャン以下の生き方です。そんな空しい生き方は嫌だから、罪を犯しません。犯すことはもう出来ないんです。

そしてもうひとつ覚えて欲しいことは、クリスチャンは三位一体的な存在であります。肉体と魂と霊という三位一体的な存在です。私たちが罪を犯すという領域は、そのうちの肉と肉体と魂の領域であります。肉において罪を犯すことについては説明が要らないと思います。でも、クリスチャンは、魂においても罪を犯すんです。それは預言者のミカが言っています。ミカ書に書いてあります。魂においても罪を犯すんだと。でも、幸いなことに私たちは、霊においては、霊の領域では、絶対に罪を犯すことはありません。もし仮に霊において罪を犯すことが出来るとするならば、私たちはもう一度救いを失って、イエス・キリストはそのためにもう一度十字架に掛けられなければいけません。ですからクリスチャンが罪を犯すことがないだとか、出来ないというのは、特に具体的には厳密な意味では、**霊において罪を犯すことは絶対にない**という、それが真意であります。肉においては確かに罪を犯します。魂においては確か

に罪を犯します。魂において罪を犯すというのは、これも皆さん体験的に分かると思います。肉を使わないで、肉体によらない罪。それはすべて魂の罪です。心の中でおぞましいことを考えます。ですから私たちは幸いこれまでは罪の奴隷でしたから、もう罪の言いなりになっていたわけです。罪のうちにとだ死ぬだけのものでした。でも今私たちは神の種をいただいて、新しい命を頂きました。キリストの命を頂きました。それによって死んでいた霊は復活したわけです。よみがえったわけです。もう二度と死ぬことはありません。キリストが一度死なれてよみがえられたのと同じように、私たちの霊も共に死んで罪は葬られて、そしてキリストと共によみがえったわけです。

**第一コリント 15 章 38 節**というところにも目を留めて欲しいと思います。『しかし神は、みこころに従って、それにかからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。』種という言葉がここにも出ています。ちょっとその先を見て下さい。**42 節**。『<sup>42</sup>死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ(種が蒔かれ)、朽ちないものによみがえらせ、<sup>43</sup>卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらせ、<sup>44</sup>血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。<sup>45</sup> 聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは(これはイエスのことです。)、生かす御霊となりました。<sup>46</sup> 最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。<sup>47</sup> 第一の人は地から出て(アダムのことです。)、土で造られた者ですが、第二の人(イエス・キリスト)は天から出た者です。<sup>48</sup> 土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に(イエスに)似ているのです。<sup>49</sup> 私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。<sup>50</sup> 兄弟たちよ。私はこのことを言うておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。<sup>51</sup> 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく(眠るというのは、肉体的に死ぬということです)変えられるのです。<sup>52</sup> 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。』これが携挙の時に起こることです。あなたのシミやシワや傷だらけのその罪汚れた肉体は、もう変えられるんです。その肉体において数え切れないほどの罪を犯してきました。その肉体はもう変えられるんです。二度と罪を犯すことのない、絶対に罪を犯すことのない体に。そうなればあなたの霊は喜びます。霊は罪を犯しません、犯すことは出来ません。でも肉体が、入れ物が罪を犯すわけです。魂が罪を犯すわけです。ですからあなたは窮屈で、いつも何か矛盾を感じたり、いつもしっくりこなかったり、いつも葛藤したり、いつも動揺しているわけです。その葛藤の姿は、パウロが上手に描いております。**ローマ 7 章**に、すべてのクリスチャンが通るその体験です。「罪を犯したくはない。でも犯してしまう。惨めだなあ。誰がこの死の体から私を救い出してくれるのでしょうか。」と。罪を犯しているクリスチャンほど惨めなものはないと、パウロも告白しています。あなただけの体験ではないのです。パウロも体験したんです。聖書の大半を書いたあのスーパークリスチャンのパウロもあなたと全く同じ体験をしているわけです。

そして、テキストに戻って頂いて**第一ヨハネ 3:10**に移りたいと思います。ですから「**神の種**」というのはいろいろな意味があります。1つはキリストの命という種。1つは神の言葉という種。他にも新しい体を生み出すところの種。朽ちない体です。これがクリスチャンに与えられております。だから罪を犯しませんし、罪を犯すことも出来ないわけです。**10 節**に『そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。(世界には 2 種類の子どものしかいません。神の子どもと悪魔の子どもです。クリスチャンとノンクリスチャンです。「あの人はノンクリスチャンですけども良い人です。その辺のクリスチャンよりもよっぽど良い人です。あの牧師よりもよっぽど牧師っぽく見えます。」とか、世の中にも素晴らしい尊敬に値する人たちがいます。でも、もし彼らがイエス・キリストを信じていなければ、彼らは神の子どもではなく、悪魔の子供なんです。「あんなに良い人なのに悪魔の子どもなんですか。」そうです。イエス・キリストを信じていなければ、全員神の子どもではないのです。神の子どもではないということは、すなわち悪魔の子どもだということです。)義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。(勿論義というのは、人の目に見て正しいということではありません。神の目に正しいことです。神の目に正しいことというのは、救い主を信じ受け入れることです。信仰によって私たちは義と認められるのです。自分の素晴らしい行い、人格によって自分を正しい、天国

行きに相応しい者とするものではありません。) **兄弟を愛さない者もそうです。**『クリスチャンとノンクリスチャンを見分けることは、いとたやすいと言っています。今まで述べてきた点は、むしろ消極的な点です。習慣的に継続的に罪を犯しているならば、罪を犯すことを何よりも楽しみとしてみっと大きな罪、沢山の罪を犯したいと言うような者たちは、もれなくクリスチャンではありません。たとえ自称していてもクリスチャンではありません。彼らは義を行いません。罪を行うわけです。それは消極的な面で、クリスチャンとノンクリスチャン、神の子どもと悪魔の子どもを見分ける術<sup>すべ</sup>であります。

もう一つここに積極的な見分け方として付け加えられているのは、『**兄弟を愛さない者**』すなわち、兄弟姉妹、クリスチャンを愛さない者もそうです。クリスチャンを愛さない者はクリスチャンではありません。兄弟姉妹を愛さない者もクリスチャンではないと。積極的な面です。11 節に『**互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。**』互いに愛し合っていないならば、これは明らかに神の命令違反を犯しているということです。「私はクリスチャンですけども、教会が嫌いです。教会に行けば、もういろいろなトラブルがあります。面倒くさいです。何を言われるか分かりません。対人恐怖症だから教会に行きたくないんですとか。クリスチャンですけども苦手なんですとか。傷つけられるのが嫌なんですとか。だからクリスチャンたちとはあまり交わりたくないんです。」もしそういう方があるならば、是非自己吟味して頂きたいと思います。あなたはクリスチャンを、兄弟姉妹を愛していないならば、あなたはもしかしたら救われていないかもしれないということを。脅しているわけではありません。確かめて欲しいのです。確信を持って欲しいのです。間違いなくあなたは天国に行けるという平安を持って日々歩んで頂きたい。それが私の今皆さんにチャレンジしていることであります。あなたを断罪したいのではありません。あなたをノンクリスチャン呼ばわりして、悪魔の子ども呼ばわりして、あなたを罵<sup>のの</sup>っているのでも何でもありません。そうではなくて、すべての人に救われてもらいたいからです。自称クリスチャンのまま気が付いたら天国ではないところにいた。そんなことがあってはならないと思っているからです。ヨハネのハートもそうです。とにかく確かめなさい。確かなものとしなさい。

12 節に『**カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行ないは悪く、兄弟の行ないは正しかったからです。**』カインは悪い者、サタンから、悪魔から出た者ですから、カインは天国にはいません。天国に行ってもカインには出会えません。アベルには出会えますが、カインには出会えません。「**カインのようであってはならない。**」カインは皆さんもよく知っていますね。最初の殺人事件を起こした兄弟殺しの犯人です。弟のアベルを殺しました。なぜ殺したのか。弟の捧げ物が神に受け入れられて、自分の捧げ物が神に拒絶された。妬んだのです。納得いかなかったのです。弟アベルが捧げたものは神様が定めたものでした。神の方法で、神が求めたものを捧げたのです。でもカインは、神が定めてもないものを、神の方法でない形で、自分の手の力で、自分勝手に自分がやりたいことをやって、それが神に受け入れられなかった。それでふてくされて、こともあろうに弟のアベルを妬んで手にかけてたわけです。とんでもないですね。アベルの捧げ物については、これは信仰によってなされた。カインの捧げ物は、信仰にはよらなかったということです。ヘブル 11:4 に書いてありますから、後で確認してみてください。(『**信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださいましたからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。**』) 自分の手で、自分の力で、自分の方法で、捧げ物をする。言い換えれば、捧げ物というのは礼拝をすることでもあります。それは受け入れられないものです。アベルのように、神の定めたもの、神の方法で礼拝を捧げなければ、神には受け入れられません。カインはアベルを妬みました。妬み、苦味、憎しみ。それらを弟にぶつけたわけです。カインは悪い者の典型、ノンクリスチャンのモデルであります。クリスチャンを殺す者は、クリスチャンを名乗ることは出来ません。私が言っている「殺し」というのは、殺人罪という肉の命<sup>あや</sup>を殺めることだけを言っているのではありません。私たちは多くの場合、言葉によって兄弟姉妹たちを手にかけてます。言葉によって殺人を行うわけです。大殺戮をします。言葉でバッサバッサと人を切りつけます。多くの場合はカインのように妬みから。「なぜあの人が祝福されるのか。むかつく。あんな人なの

に。弟のくせに。自分にはこんな力もあって、こんなことも出来るのに、なぜあんな人間が。許さない。イラつくんだ。むかつくんだ。」と、言葉で殺害をする。それは人格を殺害するのに等しい行為です。あなたが兄弟、または姉妹のことを悪く言うことによって、それを聞いた者たちはもうそのような目で人を見るようになります。所謂色眼鏡を持って、あなたが悪く言ったようにその人たちはその人のことを悪く見ます。「あっ知らなかった。あの人はこんなに悪い人だったのか。」とか、こんなにとんでもない人間だったのかと。事実を確認しないでただのゴシップに過ぎなくても、それを真に受けてしまって一度ネガティブなその人の人間評価を耳にしてしまうと、あなたは気が付いたらその人と同じようにネガティブに、否定的にその人を見るようになってしまいます。もうその人はそういう人間なんだという烙印を押してしまうわけです。それは人格を殺害するに等しい行為です。それがゴシップの恐ろしい罪です。本人が居ないところで本人の悪いこと、ネガティブなことを言いふらす。聞いた人たちはもうそういう印象を持ってしまうわけです。「あの人はあんなとんでもないふしだらな人だったんだ。」と。それが事実であろうとなかろうとも、そういう目で見えまう。恐ろしい罪です。

テキストに戻って頂いて**第一ヨハネ 3:13**『兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。』これもクリスチャンの証拠、しるしです。あなたが本当に救われているクリスチャンならば、世から憎まれます。それはあなたが救われている証拠です。ですから驚かないで下さい。クリスチャンになった途端に、今まで良好だった友達との関係もそうでなくなるかもしれません。これまで良好だった上司との関係、同僚との関係、部下との関係、また親子の関係、兄弟の関係が、良好だったのが悪くなってしまうかもしれません。あなたがクリスチャンになったがばっかりに、あなたは憎まれるかもしれません。疎まれるかもしれません。でもその時には、驚かないで下さい。あなたが救われた証拠だと思って、むしろ感謝して下さい。でも勘違いしないで下さい。それはあなたがクリスチャンであるからということです。クリスチャンでありながらも罪を犯して、そして人を困らせたり、人に迷惑をかける。それで嫌われる。それは自業自得であります。ですから、そういう話を混同しないで下さい。「あっ、迫害された。」とか、あなたが罪を犯しておきながら「これはキリストの名のゆえに迫害されているんだ。」なんて思わないで下さい。そうではなくて、ただクリスチャンであるがばっかりに不当な怒りを買う、憎しみを買う。聖書を読んでいるだけで、祈っているだけで、賛美しているだけで、暴言を吐かれて、罵られて、そして関係を絶たれたりしてしまう。イエス・キリストことをただ伝えているだけなのに、それだけで絶交されてしまう。驚いてはいけません。

次にもう一つこの**13節**のところで覚えて欲しいことは、それはクリスチャンとしてのしるしでもありますけれども、クリスチャンはなおもそういう人たちを愛し続けるべきであります。憎まれたからといって、もう愛することをやめてはいけません。クリスチャンは彼らを愛しても、彼らから愛されることを期待してはいけないと言っているんです。あなたが愛しても、彼らはあなたを憎むかもしれません。でもそれが当然なんです。それがクリスチャンとしての証拠ですから。驚いてはならないと言われていますが、あなたはそれで愛することやめてしまってはいけません。クリスチャンは愛してなんぼです。神の愛を知っているからです。それは、私たちがまだ罪人であった時から注がれている愛です。私たちが生まれる前から注がれている愛でありますから、愛しても愛されることを期待してはいけません。ノンクリスチャンの家族から愛してもらおうなどとあなたは願っても求めてもいけません。あなたが愛を求めるならば、それは神から求めて下さい。もはやあなたは人の愛ではもう満足できない人間になっているはずです。神の子どもですから父の愛が必要です。キリストの花嫁ですからキリストの花婿の愛があなたには必要なんです。あなたの夫から愛されなくても、あなたの親から愛されなくても、あなたのお父さんは天の父です。あなたの夫はキリストです。パーフェクトな方です。あなたに本当に必要なものをすべて知って、それを惜しみなく与えてくれます。

**14節**に『私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。』

ヨハネの福音書**13:34~35**にこう書いてあります。キリストの教えです。『<sup>34</sup>あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。<sup>35</sup>もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。』クリスチャ

ン同士が愛し合うことこそ、最高の証しであると言っているわけです。クリスチャン同士がいがみ合っている、言い争っている、ゴシップを言い合っている、妬み・そねみがクリスチャンの間に見られるならば、それは最悪の証しです。キリストの栄光を傷つけるもの、キリストの御名を辱めるもの、「それがクリスチャンか。」と。ノンクリスチャンを愛するよりもクリスチャンを愛することの方が、実のところもっと効果的な証しになるということです。「私は教会に行きたいけれども、ノンクリスチャンの家族がねえ。」でもあなたがクリスチャンを愛するならば、それこそが実はあなたのノンクリスチャンの愛する家族を救う最も手っ取り早い、最も実は効果的な伝道なんです。信じて欲しいと思います。クリスチャンを愛することが一番の証しです。だからといって勿論ノンクリスチャンの家族を蔑ろにするとか、悪しざまにするとかそういう意味ではありません。無視するとか、見下すとか、そういう意味ではなくて、クリスチャン同士がますます愛し合えば、あなたのノンクリスチャンの家族も、その愛をもって憧れを持ちます。「血の繋がりもない、全く生まれ育ちも背景も異なる者同士が、年齢も違う、性別も違う、こんな者同士がどうしてお互いに、お互いのことを喜び、お互いに献身的に尽くし合って、そしてこんなにも熱く愛し合うことが出来るのだろうか。こんな愛を私は知らない。見たこともない。感じたこともない。是非このような愛の共同体、このような愛の家族に自分も加えてもらいたい。」と願うわけです。でも、それをあなたがしないで、「ノンクリスチャンの家族に悪いから今日は教会に行くのはやめておこう。」とか、クリスチャンとの交わりを避けようとするならば、実際のところは一生涯あなたのノンクリスチャンの家族は、その愛を見ることも知ることも感じることもなく終わるんです。あなたからの愛だけで終わるわけです。そのまま救われずに終わるかもしれません。

そしてクリスチャンはまさにお互いに愛し合うことによってノンクリスチャンにも、この世にも認めてもらえるということを行いましたけれども、その愛というのは**第一コリント 13 章**に素晴らしくまとめられてリストアップされています。**第一コリント 13 章**、愛の章です。『**4** 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。**5** 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、**6** 不正を喜ばずに真理を喜びます。**7**(愛は)すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。**8** 愛は決して絶えることはありません。』これが愛です。ですから、是非その愛を私たちは互いに表して、そしてその愛を 1 人でも多くの人に分かち合い、知ってもらうように。愛を知る者同士、クリスチャン同士、それをこの世に示すことが出来ます。ノンクリスチャンとクリスチャンでは、残念ですけれどもこの愛を共有することは出来ないのです。あなたはそうしたいかもしれませんが、そう出来ないのです。クリスチャン同士がこの愛を知っています。クリスチャン同士が互いに愛せるのです。ノンクリスチャンとは一方通行です。互いにということは実現出来ないのです。互いにというのは、お互いにこの神の愛を知っている者同士ということですから。

そしてテキストの **15 節**。『**兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。**』イエス・キリストは、「兄弟を憎むならばあなたは人殺しだ。」と。**マタイの福音書 5:21~22** に書いてあります。「あなた方は人を殺してはならないと聞いていますと。十戒に書いてあります。でもわたしは言いますと。兄弟に対して腹を立てるならば、その者は最高議会に、ゲヘナに、地獄に落ちるに相当する罪に値する。」と言っているわけです。兄弟に対して、姉妹に対して、クリスチャンに対して腹を立てる。憎しみを抱く。殺意を抱く。同じことです。言葉によって殺害する。ゴシップによって、相手のことを否定的に言う。悪く言う。先ほども触れましたけれども、それによって聞いた者たちは色眼鏡で、そのようなレンズで人を見るようになりますから、人格が殺害されるわけです。斬り殺されるわけです。でも、逆にあなたの兄弟姉妹のことを良く言ってあげると、肯定的にその人たちのことを褒めちぎるようになると、あなたはそういう話を聞くと「あっ、是非ともその人に会いたい。そんなに素晴らしい人なら是非会いたい。」それと逆に否定的なことばかりを聞くと「絶対にそんな人とは会いたくもないし、顔も見たくない。」会ってもいないのにそう思ってしまいます。大きな違いであります。

**箴言 18:21** にこういう言葉があります。『**死と生は舌に支配される。どちらかを愛して、人はその実を食べる。**』厳粛に受け止めて下さい。あなたの舌、あなたの口は、あなたの死と生。そしてあなたの周りの人たちの死と生を左右



するのだと言っているんです。死と生は舌に支配される。どちらかを愛して、人はその実を食べると。

クリスチャンのしるしは互いの中にある愛であります。クリスチャンのしるしは十字架のネックレスをぶら下げているのではありません。クリスチャンのしるしは魚のマークを、イクテゥースの魚のマークを車に貼っている、ステッカーを貼っている、そうではありません。クリスチャンのしるしは教会に通っているものでもないのです。クリスチャンのしるしは互いに愛し合う、その愛であります。そこに永遠の命があると、そこで永遠の命を本当に満喫出来るんだと、**詩篇 133:1** にもこう書いてあります。これはダビデの詩で『**見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。**』兄弟たちが交わりを持つ、姉妹たちが交わりを持つことは、もう最高の喜び、幸せだと。**3 節**のところに『**主がそこに（兄弟たちが一つになっている、姉妹たちが一つになっている、そこに）とこしえのいのちの祝福を命じられたからである。**』とこしえのいのち、言い換えれば永遠の命の祝福がそこに必ず味わえるのだと。クリスチャン同士が互いに愛し合えば、永遠の命が満喫されます。クリスチャン同士愛しあっていない者に、永遠の命は分かりません。味わえないのです。本当の喜びはありません。命はないです。クリスチャンを愛さない者は、ゾンビのような存在です。生ける屍です。生きているようでも死んでいるようです。冷たいです。

テキストに戻って頂いてヨハネの手紙第一 **3:16**『**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。**』これがもう一つの **3 章 16 節**と言われる箇所です。もう一つというのはヨハネの福音書 **3:16**『**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**』と並んで、**第一ヨハネ 3:16**も大切な聖句です。イエス・キリストはあなたのために命を捨てて下さいました。それはあなたが罪のうちに滅びることのないためです。あなたのすべての罪を赦すためです。そのためにイエスは命を捨てて下さいました。それほどまでにあなたは愛されています。ですから私たちも互いに愛し合うべきです。兄弟のために、姉妹のために、命を捨てるべきです。兄弟を愛せない時、姉妹を愛せない時、私たちはイエスが自分の罪をどれほど赦して下さっているのか忘れてしまっている時です。どうしてもあの人のことが許せないという時、あなたは自分の罪がイエスによって赦されたことをすっかり忘れている時です。「私のような者のとんでもない罪が、イエス・キリストによって全て赦して頂いた。赦して頂いている。素晴らしい。感謝です。言葉にならないくらい、もう涙が出るほど、嬉しいことです。」一つ一つの罪をイエス・キリストが全部その身に負って、すべての罪の代価を払って下さった。漏れなくです。完璧に。そのことを思う時に胸がいっぱいになって、人を許せないなんていう思いは、もうどこかに吹っ飛んでしまいます。兄弟姉妹を愛せないなんていう思いは、もうどこかに吹っ飛んでしまいます。どれほどイエス・キリストにあなたは、私は愛されているのか。どれほどの罪を赦して頂いているのか。そのことを思う時に、私たちはもはや兄弟を愛せないとか、姉妹を許さないとか、そういうことから解放されます。主があなたに対してどれほどの憐れみを注いで下さったのでしょうか。主はあなたのためにどれほど忍耐して下さったのでしょうか。どれほどの優しさ、親切を主はあなたに示して下さいませんか。そのことを思う時に、あなたも兄弟姉妹に対して憐れみを示さずにはいられなくなります。忍耐出来ます。親切でいられます。優しさを表すことが出来ます。こんな私を。

前にもお話したことがあります。こじれた関係を取り戻すために和解するためには必ず死が必要であります。和解には死が必要であります。どちらか一方が必ず死ぬ必要があります。あなたか私かどっちかが必ず死ぬ必要があります。自分か相手かどっちかが必ず死ぬ必要があります。イエスが死んで下さらなければ、私たちは神と和解出来ませんでした。このロジックは分かると思います。和解するための唯一の方法は、死のみであります。死以外に和解する方法はありません。「もうこの人とはやっていけない。もうこの人とは仲違い。一生絶交だ。仲直り出来ない。」でも、死が和解をさせてくれます。誰かが死ぬならば、必ず和解出来ます。あなたが死ぬか、相手が死ぬか。そのどちらかです。あなたが自分に死ぬか、相手が自分に死ぬか。そのどちらかです。「私はどうしようもない罪人です。十字架刑にされても不思議ではない、とんでもない悪人です。どうかこの私を十字架につけて下さい。悪いのは

私です。」と私が言うならば、和解は成立します。またそれをあなたが言うならば、和解は成立します。あなたが死ぬば、和解が成立します。実現するんです。そのことを覚えて下さい。兄弟姉妹の間で和解をあなたが願い求めるならば、あなたが死ぬか、相手が死ぬかのどちらかです。勿論「そんな役回りは嫌です。だったら相手に死んでもらいたい。」と言うかもしれませんが、イエスはあなたのために死にました。イエスは死んでどうなったのですか。3 日目によみがえりました。「自分だけ損するとか、自分だけ、相手は？」とか。相手なんかどうだっていいんです。あなたは死ぬば、イエス・キリストことがもっとよく分かります。

17 節の方に移って頂きたいと思います。『**世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。**』兄弟姉妹が困っているのを見て、憐れみの心を閉ざすような者。閉ざすということは、もともと開いているということです。開いているものを閉じるということです。閉じているものを開くのではないのです。クリスチャンは神の憐れみを受けていますから、もう憐れみでいっぱいなんです。憐れみで心は開放されています。でも、兄弟姉妹が困っているのを見て、その開放された心を閉じてしまうならば、それは愛のないことです。それは神の愛からかけ離れた行為になります。City of joy という映画がありますけれども、その中の名ゼリフがあります。「**人生には3つしか道がない。**」または「**人生には3つの選択肢しかない。傍観するか、逃げるか、それとも飛び込むかだ。最悪の選択は、逃げる傍観者だ。**」アーメンだと思います。最悪の選択肢は、逃げる傍観者です。あなたには3つの選択肢しかないと思って下さい。傍観するか、ただ眺めているか、「ああそう。かわいそうに。不幸ですね。」それか、逃げるかです。「そんなトラブルは嫌だ。まっぴら御免だ。関わりもしたくない。」それか、どんな損害を被ってでも、傷つけられようとも飛び込む。関わる。愛するですね。最悪なのは、傍観して逃げる者です。

私たちは、18 節を見て下さい。『**子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。**』愛について語ることは簡単です。誰にでも出来ます。でも愛することはいつでも簡単ではありません。自己犠牲が伴います。命を捨てる愛、これが問われるわけです。自分を与える愛、相手から見返りを求めない愛、無条件で相手愛する愛。簡単ではありません。でも、ことばや口先だけでとありますから、言葉で愛することも大事です。特にこれは男性に、夫に必要かもしれません。「愛しているよ。」とその一言が、妻には意味のあることかもしれません。「愛しているなんて言わなくたって分かっているだろう。」とか、照れくさそうにあなたの夫は言うかもしれませんが、言葉で愛することも大事ですが、でも言葉だけ、口先だけではなくて、行いと真実をもってです。愛しているならば、真実を告げることが出来ると思います。「こんなことを言ったら傷つくかもしれない。」愛しているならば本当のことが言えるはずです。「**愛をもって真理を語りなさい。**」と、パウロはエペソ 4 章で言いました。愛をもって真理を語りなさい。愛しているならばあなたは真理を語る事が出来ます。本当のことを言う事が出来ます。「**あからさまに責めるのは、密かに愛することにまさる。**」と箴言は言っています。ですから、言葉による愛も大事ですけれども、言葉は薄っぺらい時もあります。口先だけのこともあります。ですから、行いと真実をもって愛そうではありませんか。イエスのようにです。

19 節に『**それによって(勿論愛することによって)、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り(クリスチャンであることを知り)、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。**』自分が本当に真理に属しているか、キリストに属しているか。真理はイエスのことです。「わたしは道であり、真理であり、いのちです。」イエスに属している、これがキリストに属するクリスチャンという名前の意味ですけれども、「本当にクリスチャンかどうか自分でもよく分かりません。本当に救われているのかどうか、天国に行けるのでしょうか。心に安らぎがありません。」そういう人は、兄弟を、姉妹を愛して下さい。それによって確信出来ます。確認出来ます。心に平安がやってきます。救いの確証を得ることが出来ます。保証を得ます。

20 節に『**たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。**』大事な言葉です。「**たとい自分の心が責めてもです。**」あなたの心があなたを責めます。「私は全然出来ていない。クリスチャンとして全く出来ていない。不甲斐ない。私はダメクリスチャン。セカンドクラスのクリスチャン。こんな自

分が嫌いなんです。なんでまたこんな罪を犯してしまったのか、繰り返してしまったのか。こんな罪を犯してしまった自分にすらショックです。」自分の心が自分を責めます。でも、書いてある通り、「たとい自分の心が責めてもです。」自分になっていないクリスチャンだと、自分でもそう思ってもです。神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。あなたは時に自分がとんでもない罪を犯して、そのこと自体自分でも信じられない。「なぜ私はこんな罪を犯してしまったのか、ショックです。」自分にもショックを覚えます。でも、神はショックを覚えません。なぜならば神はあなたのことを知っているからです。あなたは自分のことが全然分かっていないんです。

ローマ 7:18(『私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。』)には、あなたの肉のうちには、あなたのうちには、良いものは住んでいないと。あなたは自分でそれなりに良い人だと思っているかもしれませんが。良い人だから罪を犯すと自分でもびっくりするわけです。でも、神は何もかもご存じです。あなたのうちには善は住んでいません。あなたのうちには良いものは1つも住んでいない。神は勿論知っています。神はあなたが生まれる前から、あなたが母親の胎の中で形造られるその時も全部知っています。あなたが座るのも立つのもすべてこの方は知っています。何もかも知っています。神はあなたのために立てている計画も知っております。エレミヤ 29:11(『わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。』)。他にも詩編 139 篇。あなたはもう胎児の時から知られているという話です。そこも読んでみて下さい。神があなたのことを何もかも知っていることが分かります。

また詩編 103 篇も読んで下さい。そこには、主はあなたがちに過ぎないことを知っている。あなたの成り立ちも、何もかも知っている。あなたは、ちに過ぎないのです。ちりが何を悩んだって仕方がないですね。神はすべてご存じです。何もかもご存じです。その上であなたを愛されているんです。あなたがどんなにおぞましい人間だろうと、どんなに罪を犯そうとも、承知の上であなたを救って下さったのです。たといあなたの心が責めてもです。「こんな私はダメクリスチャンだし、もう神に愛される資格なんか無い。もうクリスチャンと呼ばれるには恥ずかし過ぎる。」たとい自分の心が責めてもです。たとい人があなたのことを責めてもです。神はあなたを責めません。なぜならばあなたのすべてを知っているからです。神はいちいちあなたの言うことなすことにショックは受けません。びっくりもしません。がっかりもしません。最初から全部知っているからです。ですから、自己嫌悪に陥っている場合ではありません。是非神の言葉にそういう時には目を留めて下さい。

21 節に『<sup>21</sup>愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、<sup>22</sup>また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。』「自分はできていないダメクリスチャンです。自分でも自分のことがもう嫌いです。自分の心が自分を責めまくるんです。」それでも神の命令、すなわち「互いに愛し合いなさい。」という命令を守っているならば、あなたが兄弟姉妹を熱く愛するならば、愛は多くの罪を覆うということを知って欲しいと思います。第一ペテロ 4:7~9 にそのことが書いてあります。(『<sup>7</sup>万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。<sup>8</sup>何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。<sup>9</sup>つぶやかかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。』)互いに愛し合うという神の命令を守れば、問題はないんです。あなたが出来ていないクリスチャンでも、また同じような罪を犯してしまうクリスチャンでも、あなたが兄弟を、姉妹を愛するならば、その愛によって多くの罪はカバーされます。

勿論誤解しないで下さい。ただ教会に通えば罪は帳消しになるとか、相殺されるという意味ではありません。具体的にいきなりと真実をもって愛するということです。言葉や口先だけではありません。命を捨てるように愛するということです。もしあなたがそのような愛を実行しているならば、保証します。あなたはもう罪を犯さなくなります。本気で兄弟姉妹を愛してみてください。その間あなたは絶対に罪を犯さないと思います。そう断言したいと思います。自分の命を捨てるほどに兄弟を、姉妹を、愛してみてください。その時あなたは罪を犯すことから解放されているはずなんです。ですから、神の命令を守っているならば、あなたは何の問題もありません。過去に何をしでかしても関係ありません。今何を

していても問題ありません。今から兄弟姉妹をそれほど熱い愛をもって愛して下さい。

最後に終わりのところを読んで終わりたいと思います。『<sup>23</sup> 神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。<sup>24</sup> 神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るので。』イエス・キリストの御名を信じ、そしてイエスが命じられた通りに互いに愛し合うということ。キリストが私たちを愛したように、私たちも互いに愛し合うということ。これによって私たちは神の命令を全うし、これによって私たちは神の愛を経験し、これによって私たちがクリスチャンである、神の子どもであるということが証明されます。立証されます。互いの間の愛、これがクリスチャンのしるしであります。イエスを信じること。自分を信じることではありません。自己実現、自己啓発ではありません。キリスト実現です。自分を愛することではなくて、互いに愛し合うことです。神を愛することです。自己尊重ではありません。セルフ・エスティームではありません。自分ではなくて、他人を愛することです。自分ではなくて、神を愛することです。これによってあなたがクリスチャンであることが証明されます。

そして御霊も、聖霊もそのことを認めてくれます。証明してくれます。ローマ 8:16 にこう書いてあります。『**私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。**』聖霊が、私たちが神の子どもであることをあかししてくれると。聖霊は私たちのうちに実を結んで下さいます。それが御霊の実と呼ばれるものです。御霊の実。愛です。互いの間の愛が私たちがクリスチャンと認めさせるものです。ガラテヤ 5 章に御霊の実が書いてあります。御霊の実は、単数形です。愛という一つの実の中に、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。御霊の実は、愛です。愛が実を結ぶ生活を送っているならば、あなたは間違いなく神の子どもです。クリスチャンです。間違いなくあなたは神の愛を体験している者です。

もし、あなたが罪を習慣的に継続的に喜びをもって自発的に意図的に犯しているならば、あなたは間違いなく神の子どもではなく、悪魔の子どもです。だからといって、地獄に落ちるほかないと言っているではありません。遅くはありませんから、今からでもイエスの御名を信じて、そして神の子どもとされる特権に<sup>あずか</sup>与って欲しいと思います。『**罪から来る報酬は死です。**』ローマ 6:23 に書いてあります。罪はあなたを破壊します。あなたの人生を狂わせます。そしてあなたの周囲の人たちを傷つけます。罪は恐ろしくも、おぞましいものです。罪を犯してはなりません。「弱いから私はつい罪を犯すんです。つい嘘を言ってしまいます。つい手を出してしまうんです。つい口を滑らせしてしまうんです。」とか。『**罪から来る報酬は死です。**』厳粛に受け止めて下さい。あなたはもうそのような罪から解放されています。罪を犯さなくても良いのです。罪の力からもうあなたは完全に解放されているので、その罪をやめることが出来ます。<sup>こんりんざい</sup>金輪際その罪から手を切ることが出来ます。完全に足を洗うことが出来るんです。弱いからとか、言い訳をしなくてもいいんです。「不幸な境遇で生まれ育ったから。親の愛をろくに受けなかったから。こんな教育を受けたから。社会が悪い。」言い訳をしなくて下さい。イエス・キリストを信じるならば、あなたはもう今までと同じ生活から完全に手を切って足を洗って新しい歩みが出来るんです。あなたの力では出来ません。何もかも主はご存知です。あなたはちりに過ぎません。あなたの心は何よりも、<sup>よろず</sup>万のものよりも陰険だということも主は知っています。今こうしてあなたは私の話を聞いていますけれども、心の中では「私のことを馬鹿にして。」とか思ってムカついているかもしれません。「失礼な。私はクリスチャンよ。まるで自分がクリスチャンではないかのようなことを私に言うなんて。」主はすべてご存知です。ですから、今是非、神の愛を受けて頂きたいと思います。体験して頂きたいと思います。この愛をまだ知らないならば、今からでも遅くはありません。心を大きく開いて下さい。そしてあらためてイエスを主と心で信じて、口で告白して、そして救われて下さい。バプテスマを受けて下さい。そして新しい歩みをスタートして下さい。

今日はこれで時間が来ましたので終わりたいと思いますが、また次回 4 章も神の愛を体験するという素晴らしいテーマですので楽しみにお待ちしております。